

平成十六年六月三十日発行
編集 社寺建造物美術協議会
発行人 小西 陳雄
〒321-1431 栃木県日光市山内二二六五
(株)小西美術工藝社 内
TEL (0288) 5411-198
FAX (0288) 5411-196

「歴史的建造物の保存に、 今なにが必要か」

財団法人 文化財建造物保存技術協会
企画室長 近 藤 光 雄

このところ、我国の森林についての議論が盛んである。シンポジウムやセミナー等があちこちで開催されているし、それに関する記事や新聞、雑誌、テレビ等々でよく耳にし、目にもする。それは外国産木材に圧され、国産材が売れなくなっていることが根本的な原因のようである。伐採しても採算がとれない間伐採、価値を失った山での労働、都市文明への知識の偏向。つまり今、日本の森は放置される危機にあるという。檜と杉の単一木を一斉に植林し、四十年で一斉に伐採する、経

済市場原理に基づく山づくりのつげが今問われているのである。これからの「森の再生」が模索される今、我々が携わっている文化財建造物保護の世界に目が向けられている。二百年、三百年先の文化財修理用資材を供給する森。つまり超長伐期の森づくりの象徴として引き合いにだされるのである。一方、その文化財建造物の世界も大きな課題を抱えている。それは修理用資材が不足していることである。現在指定されている三千八百余棟の国宝・重要文化財の九割は木

造であり、それらは風雨にさらされ、また地震、台風等の災害や虫害の被害を受ける宿命を持っている。従って、歴史的建造物を長く維持保存していくためには、どうしても必要な時期における、適正な修理が欠かせないのである。だから我々修理技術者の存在もまた必要とされている。

ところで、我々は文化財修理における基本的な理念を持っている。それは、建造物の形、用いられている材料、工法、そして環境をオリジナルと違つたものに変えないことである。この四つの要素のうち、特に、形と環境については、現状変更という厳しい手続きを経なければならぬが、その他についても監視の目を厳しく、これらは厳格に守られているといつて良い。

「保存法」以来、これまで永々と保存修理が続けられてきた。古代、中世の社寺建築に始まり、近世、明治建築と移つてきたが、古建築に使われていた木材をみると、鎌倉時代までは檜が圧倒的に多く、その後には文化財建造物の対象の拡大とともに、工具の発達と相まって、地産地消が顕著となった。その土地の良質な資材が使われるようになったのである。樺づくり、ヒバづくり、椈づくり等がそれである。さらに近世になると、長押・天井板・床柱は杉、鴨居・小屋梁は松、あるいは敷居を桜に等、木材は適材適所に使われるようになった。現在の修理は近世社寺建築中心から、近代和風建築、近代化遺産に変わろうとしている時期にある。以上のことで解るように、最近の文化財修理には多種多様な木材が最も必要とされているのである。ところが今の我国の森や里山に、応える能力はないようだ。

七年の第二室戸台風で被害を受けた建物の屋根の修理が現に待たされているのである。このことのシンポジウムや危機を訴えた記事もよく見かける。また、大径材についても、品質の低下、納期の遅れ、乾燥の問題等。特に、松の大径材については危機的状況にある。入手が困難なため、しかたなく他の材種に、あるいは外国産に変更したりする例があった。修理の基本理念を脅かすまでにきていると言えよう。檜皮や大径材等の資材は不足していると言つてもいいかも知れない。

他の資材はどうであろうか。国産漆は価格の面から外国産に淘汰され青息吐息であることは広く知られている。茅は地元の良く管理された茅場から供給されることがなくなり、品質が大きな問題となっている。こうしてひとつひとつの資材の現状を精査すると、すべての資材が供給不足として統括することはできないようだ。むしろ、資材それぞれに固有の課題をかかえていると整理したほうがいいかも知れない。しかし、さらにじっくり追求すると、共通したのが見え